

世阿弥忌と補巖寺

表 きよし

ようになって多くの資料を広げられるようになったが、見学者も増えたため、展覧方法の検討が必要な時期に来ているようだ。

八月八日午前には奈良県磯城郡田原本町味間の補巖寺で世阿弥忌が行われた。至徳元年(一二八四)創建とされるこの寺は曹洞宗で、大和の国衆十市氏の支持により発展したが戦乱で焼失。江戸時代には藤堂氏の後援を受けたが江戸末期の火災により本堂が焼失して次第に衰えた。現在は山門・庫裏・鐘楼を残すのみで、住職も常住していない。とは言え補巖寺はかつて世阿弥が禅を学んだ寺である。宝山寺蔵の世阿弥書状に見える「ふかん寺」が補巖寺であることをつきとめたのは香西精氏だった。そして昭和三十四年に表章氏が補巖寺を訪れて『納帳』(寺所有の土地台帳兼年貢収納帳)に世阿弥の法名「至翁禪門」が記された寄進田を発見、さらに香西氏が世阿弥の妻の法名「寿椿禅尼」が記された寄進田を発見したことで、この寺が世阿弥夫妻の菩提寺であることが確実となった。至翁禪門寄進田に「八月八日」とあることから世阿弥の命日も明らかとなったのである。

世阿弥生誕六百年にあたる昭和三十八年八月八日、関西能楽懇話会を中心に第一回世子忌が行われた。香西氏・表氏の講演や『納帳』の展覧があり、山本博之・山本順之・片山博太郎(幽雪)・片山慶次郎・観世寿夫・観世静夫(八世鏡之丞)などの能楽師によって「砧」の謡が手向けられた。以後毎年八月八日の補巖

世阿弥は貞治二年(一二六三)または翌年の生まれであることがわかっているが、亡くなった年は不明である。流罪となつて佐渡で暮らしていた永享八年(一四三六)まで生存していたことは確かなものの、そのまま佐渡で亡くなったのか、許されて京都または奈良に戻つて亡くなったのかは定かでなく、八月八日が命日であることが判明している。毎年八月八日の世阿弥忌前後には能楽学会が関わる催しが奈良で行われており、本誌編集者からそれらを紹介してはどうかとのお勧めをいただいた。新たな研究成果を披露するわけではないので「研究十二月往来」にはそぐわない内容であることをお許しいただき、世阿弥忌関連の催しについて報告したい。

八月七日午後に奈良県生駒市の宝山寺で世阿弥・禅竹自筆伝書等展覧が行われた。宝山寺は真言律宗の寺院で、「生駒の聖天さん」と呼ばれて信仰を集めている。江戸末期の金春大夫広成の三男(英空和尚隆範)が宝山寺で出家して第十五世管長となった縁で、金春家伝来の文書が宝山寺に所蔵されることになった。

金春家は隆範の弟の義広が継いだが流勢は振るわず、隆範が文書の散逸を恐れて預かったものかと考えられている。その存在が知られぬままに年月が過ぎ、昭和十六年に川瀬一馬氏によつて調査・報告がなされたことにより注目を集めるようになった。昭和三十年前後に伊藤正義氏や表章氏が詳細な調査を行つて、ようやく全貌が明らかになった。現在では、世阿弥・禅竹自筆文書などの貴重書は宝山寺に、そのほかの資料は般若窟文庫として法政大学能楽研究所に所蔵されている。

世阿弥自筆能本や世阿弥が禅竹に宛てた書状などが八月七日(年によつて八月九日)のこともある)に展示されるのだが、本来は虫干しであり、時期も一定ではなかった。宝山寺は宝物館などの常設展示施設を持たないため、資料は蔵にしまわれており、年に一度資料を広げて状況の確認を行つていた。その際に研究者が閲覧できるよう配慮したのが今日の展覧へと発展したのである。昭和十六年に補修された文書も年月を経て、不具合のあるものも見受けられる。畳敷きの大広間を使う

寺参詣が続けられたが、記念碑を建てる話が次第に具体化し、昭和五十七年に募金活動が開始されておよそ二〇〇万円を集め、昭和五十九年八月八日に「世阿弥参学之地」碑除幕式が行われた。以後も毎年八月八日に世阿弥忌が行われているが、本尊に手を合わせて『納帳』を披見するだけなので参加者は減少している。駅から遠いためタクシーを利用しなければならず、補巖寺を知らない運転手が多いので思いがけない苦勞を味わうことがあるのも原因の一つかもしれない。

そして八月八日午後が世阿弥忌セミナーである。この催しでは世阿弥に関わる事柄についての講演や研究発表などが行われる。補巖寺での世阿弥忌参加者の中から、せっかくこうして集まるのだから研究セミナーを催したらどうかという声が聞かれるようになり、八人の研究者が世話人となって平成八年八月八日に第一回のセミナー（第六回までは「世阿弥忌」研究セミナーが正式名称）が開催された。第一回と第二回は関西大学飛鳥文化研究所が会場で、宿泊も可能だったため、まるで学生の合宿のような盛り上がりだった。第三回からは奈良市内での開催となり、参加者の増加に合わせて会場も大きな所へと変化して、ここ数年は奈良国立博物館講堂をお借りしている。このセミナーの開催を通して能楽を中心とする学会設立の機運が高まり、平成十四年に能楽学会が発足すると、その年の第七回セミナーからは名称が「世阿弥忌セミナ

ー」となり、能楽学会主催行事として猛暑に負けない熱い議論が展開されている。

「世阿弥忌」研究セミナーだった時にはその年のセミナーの内容をまとめた「つうしん」が発行されていた。第一回「つうしん」に田口和夫先生が、檀原考古学研究所編「大和国条里復原図」によって世阿弥夫妻が補巖寺に寄進した田の現在地が把握できるということを書いている。『納帳』により至翁禪門の田は味間領字スチカイ東の八、寿椿禪尼の田は大仏供領字トカマラ北の三という所在地がわかっている。『復原図』に照らし合わせれば、現在地が判明するわけである。大和国は広範囲にわたって条里制が施行され、六町（約六五四メートル）ごとに縦横が道路・水路などで区切られていた。その方形の一区画はさらに三十六の坪に区切られており、スチカイやトカマラといった字名はこの坪の呼称にあたる。『復原図』を見ると補巖寺の北東にスジカイがあり、県道桜井田原本王子線の北側、補巖寺から徒歩十五分ほどの所に世阿弥の寄進田があったことになる。かつて田口先生に図を見せていただきスジカイに行ってみた時にはまだ田が残っていたが、現在は半分埋め立てられて事務所や倉庫が建っている。寿椿禪尼のトカマラはスジカイから県道を南東へ二キロ近く進んだ桜井市大福あたりになる。ここは現在も田のままである。

東の八とか北の三というのは、その田が坪のどこにあるかを示す。坪は十等分され、長

地型だと縦一〇九メートル、横一〇・九メートルの区画が十筆並ぶ。『納帳』によると補巖寺の土地は今の田原本町から檀原市・桜井市にわたって四十五町歩あったが、まとまって存在するのではなく、一つの坪につき長地一つから二つ、多くても半分くらいといった形で点在している。様々な形で入手した土地が寄進された結果であろう。ただ、至翁禪門の田があるスジカイは、東の一から東の九と西の畔本、すなわち坪全体が補巖寺の土地になっている。しかも、東の一は義天主仁（世阿弥の師である補巖寺二代竹窓智嚴の弟子）の年忌田、東の九は五代奇叟異珍の年忌田だから、世阿弥も特別な配慮を受けて東から八番目の長地を入手・寄進したのかもしれない。補巖寺『納帳』については香西氏の考察があり、昭和六十三年発行「田原本町史・史料編第一巻」に翻刻と解説が収められているが、不明な部分がまだ多いように感じる。

来年は補巖寺に碑が建てられてから三十年にあたる。十周年・二十周年の時には味間公民館で講演や仕舞上演などの記念行事が行われたが、建碑や周年行事に尽力された方々の多くがこの十年間で鬼籍に入られた。大和における補巖寺の役割や、補巖寺の『納帳』が表すものなど、もっと深く検討する必要がある事柄が存在している。建碑三十周年を記念して、近年の研究成果を生かしながら補巖寺の再検討を行う機会が設けられることを期待している。（国土館大学教授）